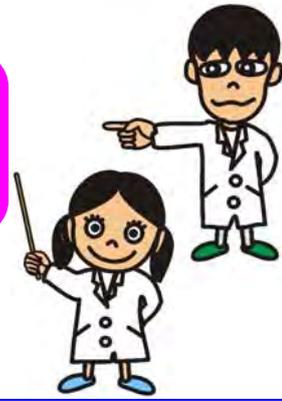


感染症に気をつけよう！



平成26年
【1月号】

横浜市内の感染症 流行状況

感染症	流行状況		説明 【 】は解説付き既刊号
感染性胃腸炎	 大流行	 増加	市全体で過去5年間と比べ最も増加し、16区で警報レベルです。適切な手洗い・消毒・加熱で予防しましょう。【12月号】
インフルエンザ	 流行	 やや増加	流行期に入りました。学級閉鎖も報告されています。下の解説を参考にして、本格的な流行に備えましょう。
RSウイルス感染症	 やや流行	 横ばい	報告の多い状況が続いています。寒い季節に流行する風邪の一つです。予防には手洗いが最も大切です。【10月号】
水痘 (水ぼうそう)	 やや流行	 横ばい	警報・注意報レベルの区もあります。例年、冬から春にかけて増加します。予防接種が有効です。

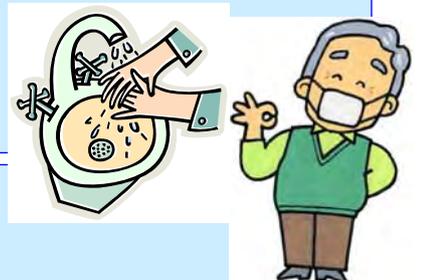
今、気をつけたい感染症 インフルエンザ

 インフルエンザウイルスの感染が原因です。症状は 38℃以上の発熱や咳、のどの痛み、全身の倦怠感(けんたいかん)や関節痛などで、普通の風邪とは違います。例年、1～2月に流行のピークがあり、学校等では集団発生も起きます。特に、高齢者・小児・妊婦や、ぜん息などの持病があると、重くなりやすく注意が必要です。

 患者の咳で飛び散ったしぶき(飛沫:ひまつ)や鼻水には、ウイルスが含まれているので、飛沫を含んだ空気を吸い込んだ人に、インフルエンザが感染します。飛沫で汚れた物に触れた手からも、目や鼻の粘膜を通じて感染します。

 感染を避けるためには手洗いうがいが必要です。また、人混みを避け、規則正しい生活を心がけましょう。部屋の湿度を保つことも効果的です。予防接種も有効です。

 患者になったら他の人にうつさないように、マスクを着けるなど飛沫が飛び散ることを防ぐ咳エチケットを守りましょう。



抗インフルエンザ薬を使って熱が下がっても、他の人にうつす場合があります。症状が出てから5日間が過ぎ、かつ、熱が下がった後2日間(幼児は3日間)は、学校等を休みましょう。

